

社会人クラブ結成 7度日本一「マツゲン」

もう一つの箕島

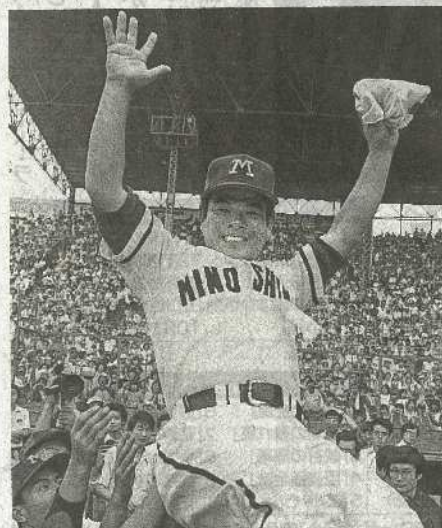


1996年の発足当初からチームを引っ張ってきた監督の西川忠宏さん＝有田市宮崎町

「尾藤魂」受け継いだ教え子



①1977年の選抜大会で優勝し、和歌山市内で大勢の市民から祝福を受ける箕島高の選手たち＝西川忠宏さん提供
②春夏連覇を達成し、胴上げされる箕島の尾藤公監督＝1979年8月21日、阪神甲子園球場



鮮やかな黄色い船体の漁船が、次々と港に入ってくる。有田市はタチウオの漁獲量日本一を誇る漁業と、「有田みかん」で知られる。

人口は約2万4千人。かつて、この小さな港ま

ちにある県立高校が、全国の高校野球ファンの心をつかんだ。

春夏合わせて4度の甲子園優勝を誇る箕島高校野球部。「尾藤スマイル」で知られた尾藤公さん(2011年に68歳で逝去)が監督を務めた。

1979年夏の甲子園大会3回戦では、星稜高(石川)と「高校野球史上最高の試合」とも言われる延長18回の死闘を演じた。この大会を制し、公立校で唯一の春夏連覇という偉業を成し遂げた。

有田市の玉木登市長(60)は当時、野球少年だった。「星稜戦はみんなテレビ中継に釘付け。優勝した時のパレードもすごかった。野球部の活躍は僕らの誇りでした」

箕島高は2013年を最後に甲子園から遠ざかっている。だが、高校と入れ替わるように、社会人野球のクラブチーム日本一に7度輝いた地元の野球チームがある。

マツゲン箕島は、スパーマーケットを展開する「マツゲン」の支援を受けてはいるが、NPO法人「和歌山箕島球友会」が運営するクラブチームとして活動している。

チーム発足のために駆け回ったのは、マツゲン箕島の現監督の西川忠宏さん(64)。

「マツゲン箕島硬式野球部」。箕島高野球部の卒業生たちが、1996年に立ち上げた。

社会人野球には、トヨタ自動車や大阪ガスといった大手企業の野球部が所属する「会社登録チーム(企業チーム)」と、選手それぞれが本業をこなしながら活動する「クラブチーム」の2種類がある。

「きつかけはたわいもないことでした」と西川さん。

95年の年の暮れ、忘年会で野球部の同期生と飲んでいて盛り上がり、硬式野球チームを作りたいと思いついたという。

恩師の尾藤さんは、この年の夏、監督を勇退したばかり。

「野球部の練習を手伝ってくれる人が少ない、と尾藤さんから聞いていました」と西川さん。

「それに、社会に出ていったん野球から離れても、まだ続けたい卒業生が多かった」

母校を再び強くすること、野球を続けられる機会づくり。その二つを同時に解決するため、有田市の拠点にしたクラブチームが必要だと思っ

た。

酔った勢いも手伝い、深夜の電車から後輩の岩田充裕さん(60)に電話した。「充裕、クラブチームを作ろう」

岩田さんは、強豪の住友金属でプレーした経験があった。企業チームのレベルの高さを肌で知っていた。「そりゃ無理でっせ。アリがゾウに立ち向かうようなものです」

それでも西川さんの熱意は揺るがない。岩田さんと2人で尾藤さんの自宅を訪ね、チーム結成を相談した。

「そんな甘いもんやない」

尾藤さんも、最初是否定的だった。だが、何度も酒を酌み交わすうちに、「分かった。協力する」と首を縦に振った。

尾藤さんはチームの資金集めのため、自ら企業などを訪ねて回った。

「尾藤さんが言うなら応援します」。多くの賛同があり、2千万円ほどが集まったという。

「あらためて、すごい方なんだと思い知りました」。岩田さんは振り返る。

初めての練習は97年3月1日。この頃は、大学や社会人まで野球を経験し、就職などで地元に戻ってきた元部員が中心だった。

球場では尾藤さん自らノックバットを握った。当時36歳だった西川さんはこう話していた。

「まだ野球に満足していない者はかり。もう一度、挑戦です」

それから28年。マツゲン箕島の選手は全員が20代前半から中盤。多くが県外から来ており、今や箕島高出身者は西川さんと監督の原井和也さん(57)の2人だけになった。

全盛期を直接知る者は、ほとんどいない。それでも西川さんは言

う。

「尾藤さんには『信じるこの大切さ』や『諦めない心』などいろいろなことを教わった。それがいまも生きている。若い選手にも、そんな『尾藤魂』を伝えていくのが僕の役目だと思っています」

マツゲン箕島は今年9月、全日本クラブ野球選手権で7度目の優勝を果たした。社会人野球日本一を決める日本選手権(10月28日開幕)に挑む。

大手企業チームがしのぎを削るこの大会には過去7度出場したが、まだ勝利はつかめていない。

「今年は過去と比べてもトップクラスの実力。なんとか初勝利をあげたい」



箕島高OBが社会人チーム67人で結成都市対抗めざす

1997年3月、箕島球友会の結成後練習を伝える朝日新聞の記事。箕島高校野球部の監督だった尾藤公さんがノッカーを務めた

母校再び強く、野球続けたい… 熱意が名将動かす

母校を再び強くすること、野球を続けられる機会づくり。その二つを同時に解決するため、有田市の拠点にしたクラブチームが必要だと思っ

た。

酔った勢いも手伝い、深夜の電車から後輩の岩田充裕さん(60)に電話した。「充裕、クラブチームを作ろう」

岩田さんは、強豪の住友金属でプレーした経験があった。企業チームのレベルの高さを肌で知っていた。「そりゃ無理でっせ。アリがゾウに立ち向かうようなものです」

それでも西川さんの熱意は揺るがない。岩田さんと2人で尾藤さんの自宅を訪ね、チーム結成を相談した。

「そんな甘いもんやない」

尾藤さんも、最初是否定的だった。だが、何度も酒を酌み交わすうちに、「分かった。協力する」と首を縦に振った。

尾藤さんはチームの資金集めのため、自ら企業などを訪ねて回った。

「尾藤さんが言うなら応援します」。多くの賛同があり、2千万円ほどが集まったという。

「あらためて、すごい方なんだと思い知りました」。岩田さんは振り返る。

初めての練習は97年3月1日。この頃は、大学や社会人まで野球を経験し、就職などで地元に戻ってきた元部員が中心だった。

球場では尾藤さん自らノックバットを握った。当時36歳だった西川さんはこう話していた。

「まだ野球に満足していない者はかり。もう一度、挑戦です」

それから28年。マツゲン箕島の選手は全員が20代前半から中盤。多くが県外から来ており、今や箕島高出身者は西川さんと監督の原井和也さん(57)の2人だけになった。

全盛期を直接知る者は、ほとんどいない。それでも西川さんは言

う。

「尾藤さんには『信じるこの大切さ』や『諦めない心』などいろいろなことを教わった。それがいまも生きている。若い選手にも、そんな『尾藤魂』を伝えていくのが僕の役目だと思っています」

マツゲン箕島は今年9月、全日本クラブ野球選手権で7度目の優勝を果たした。社会人野球日本一を決める日本選手権(10月28日開幕)に挑む。

大手企業チームがしのぎを削るこの大会には過去7度出場したが、まだ勝利はつかめていない。

「今年は過去と比べてもトップクラスの実力。なんとか初勝利をあげたい」

もう一つの「箕島」を率いてきた指揮官は、その力を込める。

その先には、チーム結成時からの悲願である社会人野球の最高峰・都市対抗野球出場を見すえている。(白木琢歩)

甲子園で春夏連覇を成し遂げた箕島高校。公立では今も唯一の偉業だ。時をへて、名将・尾藤監督の教え子たちが立ち上げた社会人野球クラブチーム「マツゲン箕島」は地域の社会課題を解決する重要な役割を担っている。「もう一つの箕島」の姿を3回にわたって描きます。